

いかにしてフランス革命はラディカルになったのか？ Le Processus de radicalisation au début de la Révolution française¹⁾

ティモシー・タケット（山崎耕一 訳）
TACKETT, Timothy; YAMAZAKI Kōichi (tr.)

以下に掲載するのは、2003年5月2日に佐野書院において開催された、社会科学古典資料センター主催の講演会における、ティモシー・タケット教授の講演の記録である。同教授は、1945年にカリフォルニア州サンタ・モニカでお生まれになり、1969年にスタンフォード大学で修士号を、1973年にスタンフォード大学で博士号を取得された。マークウェット (Marquette) 大学助教授 (1974-79)、カトリック大学助教授 (1979-85) 同教授 (1985-88) (この間、1982-83にレンヌ大学客員教授) を経て、現在、カリフォルニア大学 (University of California, Irvine) の教授を勤めておられる。主要な著作は以下のとおりである。(山崎耕一)

Priest and Parish in Eighteenth-Century France: A Social and Political Study of the Curés in a Diocèse of Dauphiné, Princeton, Princeton University Press, 1977

Religion, Revolution, and Regional Culture in Eighteenth-Century France, Princeton, Princeton University Press, 1986 (仏語訳 1986)

The French Revolution Research Collection. Section 8. Religion, Oxford, Pergamon Press, 1989

Atlas de la Révolution française. vol. 9, Religion, (共編) Paris, Editions de l'EHESS, 1996

Becoming a Revolutionary: The Deputies of the French National Assembly and the Emergence of a Revolutionary Culture (1789-1790), Princeton, Princeton University Press, 1996 (仏語訳 1997, 伊語訳 2000)

When the King Took Flight, Cambridge, MA, Harvard University Press, 2003

講 演

フランス人は1789年にどのように急進化したのでしょうか。イデオロギーの勝利によるのでしょうか。経済的・社会的な危機の結果でしょうか。それとも、君主制政府の崩壊がもたらした権力の空白を埋める必要性をむしろ問題にすべきなのでしょうか。また、この急進化と結びついている心理的変容は、革命そのものよりも前に起こっていたのでしょうか、それとも単に諸事件の流れの中で生じたのでしょうか。これらの問題をめぐっては、この2世紀間、みずからが革命に参加した何人かの人によって始められ、現在まで続いている討論があるわけです

¹⁾ Alain Spiess と Brigitte Gaïti にフランス語についての協力を感謝する。

が、その討論のすべてを見直すことは可能でもないし、必要でもありません²⁾。今回はこれらの問題に関する若干の考察を示したいと思いますが、それは革命現象の全体を分析することによるのではなく、この革命においてとりわけ重要な役割を演じることになった一千名ほどの人々、すなわち三部会および制憲議会の議員たちの経験と足取りをたどることによります。考察の大部分は、2種類のデータを観察するものです。第一に、我々は議員たちの1789年以前の出白と経歴、および1789年以降の政治的選択に関するコンピューター化されたデータバンクを作りました。年齢や職業のように簡単に数量化できるものだけでなく——それらについては、すでにいくつかのプロソポグラフィの研究が存在します——、経済状況、教育、さらにはイデオロギー的な位置や政治文化に関わる諸要因にも、調査を広げました³⁾。その上で、これらの同じ議員たちが書いたものをサンプルとして利用しました。第一に1789年5月以前に出版された書物やパンフレット⁴⁾であり、第二に、それよりも恐らく重要なものが、30点ほどの個人の日記と、革命のさなかに百人ほどの議員によって連日書かれた全部で6000通ほどの手紙です⁵⁾。もちろん、これらの文書はそのまますぐに利用できるものではありません。歴史学と文脈連関の双方からの批判によってふるいにかけなければならないのです。それでも、これらの手紙の大部分は大急ぎで、文学的な推敲を経ずに——議場の中で膝の上に紙を置いて、または夜遅く床に就く前に——書かれたことは指摘できます⁶⁾。議員たちのヴェルサイユ滞在中における態度の変遷を明らかにする点でこれらの文書が大きな価値を持つのは、これらが前もって練り上げることなく即興で書かれたという性格に拠っているのです。これらの文書をもとにして、1789年5月と6月の急進化の過程を追い、それによって革命の起源に関する様々な仮説を検証してみました。その探究と推論のすべての足取りをここでお話することはできないだろうと思います。ただ、もっとも重要な結論のいくつかを要約的に示してみたいと思っております⁷⁾。

我々の研究から導くことのできる第一の考察は、革命期の急進化はおそらく一様でもなければ直線的なものでもないということです。それはむしろ、いくつかの危機や不意打ち、継起的な段階に応じて生じたのです。この段階のそれぞれは、特有の勢いの重なりあいや、やはりそれぞれに特有な原因と結果の全体によって特長付けられています。我々の研究からは、よく引

²⁾ 研究史については William Doyle, *Des origines de la Révolution française*, Paris, 1988, pp. 21-60; Lynn Hunt, *Politics, Culture, and class in the French Revolution*, Berkley, 1984, pp. 3-10; D.M.G. Sutherland, *Révolution et Contre-Révolution en France: 1789-1815*, Paris, 1989, pp. 21-22; Michel Vovelle, "L'historiographie de la Révolution française à la veille du bicentenaire", *AHRF*, 272 (1988), pp. 113-126

³⁾ 約60の変項から成るデータバンクであり、様々な伝記や人名事典を基にした。Edna Hindie Lemay, *Dictionnaire des constituants, 1789-1791*, 2 vols., Paris, 1991, および1940年代から50年代に G. Lefebvre とそのグループによって準備され、現在は Institut de la Révolution française に保管されている fichier biographique sur les Constituants (以下, "Fichier Lefebvre") などである。

⁴⁾ 将来の議員によってフランス革命前に出版され、B.N.の *Catalogue des imprimés* に収録されているものをすべて取り上げた。

⁵⁾ 129人の証言であり、これは議員全体の約10%にあたる。完全なリストは拙著 *Par la volonté du peuple: Comment les députés de 1789 sont devenus révolutionnaires*, Paris, 1997 の文献目録を参照。

⁶⁾ lettres de Pierre-Marie Irland de Bazôges, le 4 septembre 1789: A.D. Deux-Sèvres, Fonds Beauchet-Filleau, registre non classé de "Lettres politiques, 1788-90"; de Joseph Delaville Le Roulx, le 29 mai et le 30 décembre 1789: A.C. Lorient, BB 12-13

⁷⁾ 以下に示す考えの大部分は拙著 *Par la volonté du peuple* の最初の4章を参照。

用されるダニエル・モルネの考察が確認されます。すなわち「革命の諸原因の歴史と革命の歴史は別のものだ⁸⁾」ということです。諸事件の最初の局面、すなわち1789年7月頃までに話を限って言えば、急進化に関して4つのあり得べき源泉を考慮しなければなりません。イデオロギー、社会的敵対関係、政治的習練、および集団力学の効果です。

革命のイデオロギー的原因

啓蒙のイデオロギーがフランス革命に及ぼした影響に関する2世紀来の大がかりな議論については、よく知られています。18世紀の主要な著述家たちの立場や説にはかなりの相違や、さらには矛盾が存在しており、啓蒙の単一の「イデオロギー」を語ることは結局のところできないのですから、この議論を結論に導くのはかなり厄介です。啓蒙の時代には、様々な伝統的な紛争や、色々に対立する論理の流れやアプローチの方法などが混在していました。ヴォルテールの視点とルソーの視点との対立、すなわち理性とエリート主義にアクセントをおく哲学と、感情・本能および民衆の意志を強調する哲学の対立は、しばしば言及されます。しかし同様に、重農主義者たちのテクノクラートの啓蒙の流れ、17世紀の偉大な科学革命を受け継ぎ、社会改革の動きとはかなり間接的にしか関わりを持たない科学的な流れなども区別せねばなりませんし、メスメル主義、天啓主義、フリーメーソンなどの動きに見られるいわば「オカルト的」な流れ⁹⁾も見べきです。恐らく、3身分の代表すべてが、様々ななかたちで、啓蒙の思想と言語に触れていました。しかしそれぞれの人は、互いにまったく異なるやり方で、当時の様々な思想を採用したり、適応したり、または放棄したりしていたはずなのです。

革命期以前に未来の議員たちによって出版された著作——全部で116人によって書かれました——を検討してみると、改革派の精神や大哲学者の熱意に直接結びついているものはほとんどないことがわかります¹⁰⁾。それらの大部分は文学もしくは学術的な著作です。1789年の諸事件の精神を予見させるものは、ほとんど見つかりません。詩文や短編小説、古典様式やロココ様式の芝居などであって、ヴォルテールやディドロの批判精神や憤激、嘲弄とは程遠いものです。そこに認められるのはむしろ、研究者、学者、物知りであって、とりわけ歴史や自然誌の事実や詳細をかき集めることに興味を抱いているのです。それに、これらの議員兼著述家のカテゴリーすべての中で、当時もっとも高い評判を得ていたのは、恐らく法律および法学理論の専門家でした。第三身分の法曹たち、たとえばカミュ、メルラン・ド・ドゥエ、ランジュイネ、ブーシュ、タルジュ、デュラン・ド・マイヤン、ムロなどは、フランス法関係者の世界ではどこでもよく知られていた文書を刊行しました。他の12人ほどは地方的にはかなりの評判を得ていました。彼らのうちの何人もが国民議会での討論や委員会での作業で一義的な役割

⁸⁾ Daniel Mornet, *Les origines intellectuelles de la Révolution française*, Paris, 1933, p. 471

⁹⁾ 啓蒙の様々な流れについては、Mornet, *op. cit.*; Keith Michael Baker, *Au tribunal de l'opinion: essais sur l'imaginaire politique au XVIIIe siècle*, Paris, 1993, surtout chap. 1; Ran Halévi, *Les loges maçonniques dans la France d'Ancien régime, Aux origines de la sociabilité démocratique*, Paris, 1984; Robert Darnton, *La fin des Lumières: le mesmérisme et la Révolution*, Paris, 1984; "The High Enlightenment and the Low Life of Literature", *Past and Present*, no. 51, 1971, pp. 81-115; Bernard Plongeron, "Recherches sur l'Aufklärung catholique en Europe occidentale (1770-1830)", *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 16 (1969), pp. 555-605.

¹⁰⁾ 上記注(4)参照。議員兼著作家による作品は、神学・宗教が9%、美文学が27%、歴史が16%、経済学が11%、法律が13%、政治・社会が14%、科学・数学が9%、その他が1%を占める。

を演じるようになるだけに、彼らの出版リストは印象深いものがあります¹¹⁾。

実のところ、書いたものから判断する限り、弁護士や司法官だった議員の大部分は啓蒙人のイメージと共通するものは何ありません。いくつかの例外を除けば、彼らの裁判趣意書は伝統にのっとった文体で起草され、ローマ法や中世およびアンシャン・レジームの王令、さらには聖書からの博識な引用で満ちています。この伝統においては、正義、公正、首尾一貫性および有効性の力が哲学的な価値よりも勝っているのです¹²⁾。ルソーの弟子を自認する少数のグループも、恐らく『告白』や『新エロイズ』の方を『社会契約論』よりも好んでいました。その上、革命が始まるとこのグループは、ジャコバン派の急進主義から反動的な反革命まで、ありとあらゆる政治的立場に散らばったのでした¹³⁾。フランソワ・フュレたちは、フランス革命前夜における議員たちの政治文化はなによりもまずルソーの思想に基づいていると主張したのですが、今述べたように私たちが分析したデータからはこうした命題を確認することはできないのです¹⁴⁾。

我々は 30 人ほどの未来の第三身分の議員たちが革命前夜に出版したパフレットや他の政治的著作を見つけました。どちらかと言えば限定されたサンプル数ですが、大きな影響力を持つことになる未来の議員たち何人かの意見の広がりについて見当をつけることができます¹⁵⁾。たとえば、いくつかのテーマについてはほぼ全般的な合意があったのを見て取ることができます。ほぼ例外なく、議員たちは重要な改革をめざしていました。それは確かです。たとえば定期的に召集され、税について討議する権利を持ち、身分ごとにではなく議員ごとに投票する三部会です。これらは、様々な時点で何人かの大臣から提案されていたものであるにしても、多くの面において漸進的でリベラルな要求です。しかし、ほとんど誰も主権の問題や、将来における三部会と国王の関係の問題には気付かなかったようなものには注目すべきです。王制の存在を合

¹¹⁾ この段落で挙げられた 8 名の法曹（実際には 7 名：訳者）のうち 6 名は制憲議会でもっとも重要な 40 名の演説家の中に入っている。この議会でトップの演説家 20 名のうち 17 名は法律を勉強していた。Tackett, *Par la volonté du peuple*, Appendice II 参照。

¹²⁾ David A. Bell, *Lawyers and Citizens: The Making of a Political Elite in Old Regime France*, Oxford, 1994, pp. 38 & 168. 未来の議員によって書かれた裁判趣意書は、A. Corda et A. Trudon des Ormes, *Catalogue des factums et d'autres documents judiciaires antérieurs à 1790*, Paris 1890-1936 に収録されたものを参照した。

¹³⁾ たとえば、ルソーの信奉者のうちロベスピエールとルクレールはジャコバン派に、ベルガスとブフレールはモナルシアンに、フェリエとレゼ＝マルネジアは貴族の右派に、ダントレーグは反革命的亡命者のリーダーになった。Roger Barny, *Jean-Jacques Rousseau dans la Révolution française, 1789-1801*, Paris 1977; および *Rousseau dans la Révolution: le Personnage de Jean-Jacques et les débuts du culte révolutionnaire (1787-1791)*, Oxford, 1986 も参照。

¹⁴⁾ François Furet, *Penser la Révolution française*, Paris 1978, pp. 50-52; および Norman Hampson, *Prelude to Terror: The Constituent Assembly and the Failure of Consensus*, Oxford, 1988, pp. 5-7, 42.

¹⁵⁾ サンプルは B.N. にあるパンフレットに限られる。そこに含まれるのは 1788 年 8 月から 1789 年 5 月までに出版された作品で、著者が未来の議員である Barnave, Bergasse, Boislandry, Boissy d'Anglas, Charles-François Bouche, Bouchette, Etienne Chevalier, Delandine, Gaultier de Biauzat, Gauthier des Orcières, Guillotin, Hell, Lanjuinais, La Revellière-Lépeaux, Charles-François Le Brun, Jean-Baptiste Leclerc, Le Goazré de Kervelegan, Lenoir de La Roche, Malouet, Mounier, Pellerin, Pétion de Villeneuve, Rabaut Saint-Etienne, Robespierre, Roederer, Sèze, Target, Thouret, Vernier, Volney のものである。Harriet Applewhite, *Political Alignment in the French National Assembly, 1789-1791*, Baton Rouge, 1993, とりわけ 2 章参照。

理的な発展によるものとして正当化した議員は一人しかおらず、他のすべては王制を自明で異論の余地のないものとして受け止めていました。18世紀における君主制の「非神聖化」が色々に語られますが、ここでは国王に対する異様なまでの忠誠、論理的な分析を完全に越えた、親を思うような情動的な愛着に出会うのです¹⁶⁾。

しかし、他の問題に関しては、未来の議員たちの間に意見の一致を認めるのは、非常に困難です。例えば地方の特権とか民衆の社会的・政治的な位置とかに関しては、急進的なものから反動的なものまで、広範な意見のひろがりが見られます。何人かの議員——例えばヴォルネとか、ある程度はロベスピエールとかタルジェとかですが——彼らはフランス革命のある種の立場をはっきりと先取りしているのが見られますが、大多数は多くの問題に関して、どちらかと言えば穏和な態度を示しています。とはいえ、多様な視点が見られることは明らかです。とりわけ、正当化の論理として用いられるものや、推論の際に既知事項とされるもののような、認識論上の前提に関して、彼らは一致していません。何人かを除いて議員兼著述家の大部分は、複雑な分析手段を用いており、そこでは、単に哲学と理性のみならず、歴史や経験、実践、さらには慣習までもがごちゃ混ぜにされているのです。彼らの書き物が指し示しているのは、革命的な改変でもあれば緩慢で慎重な改革でもあり、その作者たちは誰も、将来のデクレが打ち立てることになる変革の広さを想像しなかったのです。実際、彼らの1789年5月までの書き物からは、共通した議論のラインもなければ、合意も、見当がつくような言説もないのです。それどころか、1780年代末には未来の第三身分の議員たちの間には、一連の様々な改革や変容について、いくつもの概念の枠組みが存在していると主張したいくらいです。

多くの場合、啓蒙の思想家たちの中でもっともラディカルな人たちの政治的な提案を議員たちが「理解」し始めるには、1789年の夏になって革命の力学が実地に移されるのを待たねばなりません。メーヌ地方の代表であるモープティが、5カ月も前に読んだアベ・シエイエスのパンフレットを新たな目で見直すのは6月初めのことです¹⁷⁾。現実の試練に会い、自らの行動を説明したり正当化したりする必要に迫られて、議員たちは首尾一貫したイデオロギーを練り上げるようになり、18世紀の諸思想の様々な要素をつぎはぎすることになるのです。啓蒙思想を特に参照するという態度は、5月から6月初頭にかけてはほとんど見られませんが、1789年の夏から秋にかけては、議員たちの意見表明においてより普通になります。

社会的敵対関係

1789年における急進化の社会的源泉に関しては、マルクス主義の分析は30年以上前からアルフレッド・コバンやフランソワ・フュレのような歴史家たちによって厳しく批判されています¹⁸⁾。アンシアン＝レジーム末期の貴族とブルジョワジーは経済的な面での階級利害においてほぼ一致しており、それはとりわけ不動産所有の優越に基づいていたこと、それ故に支配的生産様式において類似の関係にあったことが、繰り返し倦まずに主張されています。この解釈に

¹⁶⁾ Jeffrey Merrick, *The Desacralization of the French Monarchy in the Eighteenth Century*, Baton Rouge, Louisiana, 1990; Chartier, chap. 6; Lynn Hunt, *Le roman familial de la Révolution française*, Paris, 1992, chap. 2 参照。

¹⁷⁾ Michel-René Maupetit, “Lettres de Michel-René Maupetit, député à l’Assemblée nationale constituante, 1789–91”, ed. Quéruau-Lamérie, *Bulletin de la Commission historique et archéologique de la Mayenne*, 1902, pp. 157–160

¹⁸⁾ Alfred Cobban, *The Social Interpretation of the French Revolution*, Cambridge, 1968; Furet, *op. cit.*

従えば、当時はエリートたちの真の結束が実現しており、その結束は、社会的流動の可能性によりブルジョワジーが貴族に入り込むことができることによって強化されていたわけです¹⁹⁾。しかし、急進化の説明を階級分析に基づかせることを問題にするのは——何人かの歴史家が示唆しているように——社会的な説明全部を疑問視することではありません。実際、貴族身分の議員と第三身分の議員を隔てる溝は階級への帰属に伴う溝よりもずっと広い分野に及んでいて、財産や教育、社会的地位の重要な相違を含んでいるのです²⁰⁾。我々の研究から見ますと、いくつかの変項による社会的相互作用を考えるマックス・ウェーバーのモデルの方が、カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスによるモデルよりも有効なようです。

貴族の場合に関して言えば、この社会層がどの程度まで、もっとも上層の部分である古くからの軍人貴族によって支配されていたのか、まだ十分に力説されてはいないようです。第二身分(=貴族)議員の少なくとも四分の三は爵位を持つ貴族でした。3人の王族、16人の公爵——うち9人は王国重臣——、83人の侯爵、104人の伯爵および子爵、28人の男爵が、そこに含まれます²¹⁾。議員のガロン・ド・ラ・ベヴィエール——彼自身は単なる「勲爵士」でしたが——は同僚たちの衣服と勲章に眩惑されています。彼は「私たちの院には多くの大領主がいて、青綬、朱綬、サンルイ勲章、その他ありとあらゆる色や形の勲章を帯びている」と89年5月に妻に書き送っています²²⁾。これらの議員が持つ貴族称号の80%は16世紀に、60%は中世にまでさかのぼるものです。これらの数字をしかるべく位置づけるには、18世紀末のフランス全体では貴族の三分の二はせいぜい200年しかたたない叙任貴族だったことを想起する必要があります²³⁾。

これらの貴族の大部分は裕福、さらには非常に裕福でした。50%以上はパリに住んでいます²⁴⁾。そこで彼らは10万リーヴルもしくはそれ以上の年収を得ています。多くは不動産所有からの収益ですが、貿易や産業への投資によるものも含まれています。首都以外では議員たちの財産は明らかに少ないようですが、それでもほぼ全員が活動的で繁栄した地方貴族層に属しているのです。自分たちの城館に住んでいる、もっともつましい者でさえ、優に年収2万ない

¹⁹⁾ Applewhite, *op. cit.* p. 11; William Doyle, *The Ancien Régime*, Atlantic Highlands, New Jersey, 1968, pp. 25-26; David Bien, “La réaction aristocrate avant 1789: l'exemple de l'armée”, *Annales E.S.C.*, 1974, pp. 23-48, 505-34.

²⁰⁾ (20) ここでは第一身分、すなわち聖職者は考慮しない。この身分は、三部会での政治的交渉において一定の役割を果たした。しかし社会的観点からみると、貴族と平民という同じ線で分けられるのである。

²¹⁾ 1789年から1791年までに議席を占めた——辞任や死亡に伴う補欠を含めて——322名の貴族議員のうち234名(73%)は爵位を持っていた。他方、ボルドー、リモージュ、グルノーブル、シャロン=シュル=マルヌおよびルアンの各徴税区のキャピタシオン台帳に記載された貴族全体のうち、爵位を持つのは2ないし6%に過ぎない。A. N., P5170, 5298bis, 5392 & 5417, 5765.

²²⁾ Claude-Jean-Baptiste de Garron de La Bévière à sa femme, lettre du 6 et 12 mai 1789: A.D. Ain 1 Mi 1.

²³⁾ Guy Chaussinand-Nogaret, *La noblesse au XVIIIe siècle. De la féodalité aux Lumières*, Paris, 1976, pp. 48-49. 貴族の年限の計算は Henri Jouglu de Morenas, *Grand armorial de France*, 6 vols., Paris, 1934-49 に基づく。

²⁴⁾ *l'Almanach de Paris, Première partie, contenant les noms et qualités des personnes de condition pour l'année 1789* (Paris, 1789) に拠る。1789年に居住地がわかっている244名の貴族議員のうち127名(52%)がパリ在住であった。

し3万リーヴルを得ていました。それだけの収益によって、彼らは地域社会において抜きんでたのです²⁵⁾。

職業に関しますと、貴族議員のほぼ五分の四は軍の将校としてのキャリアを積んでいました。彼らのうち、少なくとも75人は実戦の経験がありますし、大部分は1789年においてもなお、現役の軍人でした²⁶⁾。しかし、戦火を経験していない者にとっても、軍隊経験はその人生に強い色彩を添えていました。ラ・ベヴィエールは軍隊時代を思い出し、三部会で再開した将校たちに対して深い同僚意識を示しています²⁷⁾。議員たちの多くは若年のうちに、中等教育の初歩を学んだだけで、軍隊生活に入りました²⁸⁾。第三身分の議員と較べると、貴族議員の教育年限は明らかに短かったのです。大勢の議員は——彼らの書簡を基にすると——位階制、名誉、およびしばしば伝統的カトリック信仰という理念が、とても活き活きとしていました。領地を「資本主義的」で合理的に経営している貴族においても、より伝統的に位階制的で宗教的な世界観がはっきりと息づいていたことが指摘できます²⁹⁾。

第三身分の議員について見ますと、彼らがそれぞれの地方でブルジョワのエリートに属しており、時には貴族との境界に生きていた場合であっても、明らかによりつましく、貴族風なところはありませんでした。大部分は法律関係者でした。少なくとも218名の司法官、181名の弁護士、および40名ほどの下級国王官職保持者が認められます³⁰⁾。これらの議員はすべて——貴族議員の大部分とは逆に——中等教育を終えていたはずであり、大部分は大学教育を経て、法律に関連した職業訓練を受けていました³¹⁾。法曹気質が——すでに指摘したように——第三身分の文化のもっとも典型的な特質になるのです。

第三身分の他の議員は、主に貿易商人、医師、およびなんらかの意味で農業にタッチする地主でした³²⁾。職人や小農民は見られません。ほぼすべての議員が相当額の財産を持ち、安楽な生活を送っていました。通常、何世代にもわたって地所を拡げていった、しっかり根を下ろした家柄の出身でした。調べてみると、かなり広範囲の収入と富を享受しており、もっとも裕福な者は地方社会の頂点に位置していて、何人かの貴族議員と同じか、それ以上の経済的地位にありますが、大部分は貴族よりも明らかに下であったことがわかります³³⁾。たとえば、第三身

²⁵⁾ 拙著英語版 *Becoming a Revolutionary: The Deputies of the French National Assembly and the Emergence of a Revolutionary Culture (1789-1790)*. Princeton, 1996, pp. 318-320, appendice sur “Estimated Deputy Fortunes and Incomes” 参照。(この付録はフランス語版には掲載されていない)

²⁶⁾ Fichier Lefebvre および Lemay, *op. cit.* 322名の貴族議員のうち少なくとも259名(80%)が将校だった。

²⁷⁾ La Bévière, lettres du 3 et 16 mai, et du 29 octobre 1789

²⁸⁾ 軍隊生活に入る時、彼らの多くは12才ないし15才である。Fichier Lefebvre および Lemay, *op. cit.*

²⁹⁾ La Bévière, lettres, *passim*.

³⁰⁾ 1789年から1791年にかけて議会に正式に席を占めた633名の第三身分議員のうち438名(66%)は法律関係者とみなし得る。

³¹⁾ Michael Fitzsimmons, *The Parisian Order of Barristers and the French Revolution*, Cambridge, Mass., 1987, pp. 4-6; David A. Bell, “Lawyers into Demagogues: Chancellor Maupeau and the Transformation of Legal Practice in France, 1771-1789”, *Past and Present*, no. 130, 1991, p. 112.

³²⁾ 21名の医者、16名の教授、99名の商人と貿易商、および135名ほどの「ブルジョワ」「地主」もしくは「耕作者」

³³⁾ 注(25)参照

分議員の結婚持参金の平均は 26000 リーヴル前後です。これは貴族の平均のたった一五分の一なのです³⁴⁾。ですから、大部分についてみれば、これら二身分の代表者たちは文化のおよび社会経済的に、根本的に異なる世界に住んでいたのです。

しかし、この社会経済的な裂け目は、第三身分において、不当だという感情もしくは怒りへとつながったのでしょうか。第三身分の議員たちは、通常、アンシアン＝レジームの価値体系を自らのものとすることで社会的に成功した家庭の出身でした。これらの人々の成功自体が、ゲームの規則に通じていることの保証だったのです。それでも時には、平民議員の何人かのうちに、社会制度に関して緊張と不満を感じる場合があります。それは、経済的立場についても、「地位」や威信の問題についても、生じる緊張です。裕福な弁護士であるタルジェは、王弟のアルトワ伯が自分に話しかける際、名前に「ムシュー」をつけず、まるで召使に対するように「お前」呼ばわりしたので、苦痛を隠しきれずにいます³⁵⁾。また、高名な議員であるバルナーヴの社会的昇進の閉鎖に関する考察はしばしば引用されました。「いたる所で道は閉ざされている。わずかな限られた昇進しか、我々の前には開かれていない」というものです³⁶⁾。革命前夜に書かれたパンフレットにおいて、これらの議員の大部分は第二身分に対して苛立っており、敵対的にすらなっているのです。彼らが書くものには、他では見られない怒りと情念がしばしば認められます。たとえばランジュイネは「民衆の労働で生活している寄生団体」と語り、セーズは「かの恐るべき封建的貴族制」と言い、ヴェルニエは平民を「下賤な踏み台」として軽蔑する貴族を批判しています³⁷⁾。国民議会において、じきに保守派を形成することになる人々——たとえばムニエ、マルエ、ベルガスなど——も、貴族にたいしては腹立たしく思っているのです³⁸⁾。貴族に対するこのような反感は明らかに、——後に見ますが——革命初期における議員たちの急進化のひとつの要因となりました。

政治的習練

それでも、未来の議員たちが前もって政治的習練を積んでいなかったら、1789年の諸事件は想像が困難なものです。この習練は、かなりの部分、君主制政府それ自体によって与えられたのでした。1780年代に、この政府は重大な政治的・経済的危機に直面せねばなりません。この危機の主要因はよく知られています。租税制度の構造的弱点、いくつかの司法組織の政治的反対、ルイ 16 世の国家元首としての無能性などです。政治事件を 25 年来間近に観察してきたパリの弁護士のタルジェは、1787 年 1 月に「ルイ 16 世、自らの役職をなし得る唯一の人物だが、他人の意志にしか従おうとしない。権力の行使は、日増しに不安定になっている」と自分の日記に記しています。ロレーヌの地主で教養人のデュケノワも同じ結論です。すなわ

³⁴⁾ 貴族の平均額は 406712 リーヴルである。12 の県立古文書館の——証書管理局のアルファベット索引に収録された——婚姻証書に拠る。Tackett, *Par la volonté du peuple*, appendice I 参照。

³⁵⁾ Paul-Louis Target, *Un avocat du XVIIIe siècle*, Paris, 1893, p. 53

³⁶⁾ Jean-Jacques Chevallier, *Barnave ou les deux faces de la Révolution*, Grenoble, 1979, p. 33.

³⁷⁾ Jean-Denis Lanjuinais, *Le préservatif contre l'avis à mes compatriotes, avec des observation sur l'affaire présente*, s.d., pp. 15, 22; Paul-Victor de Sèze, *Les vœux d'un citoyen*, Bordeaux, 1789, p. 16; Théodore Vernier, *Le cri de la vérité*, ca. Dec. 1788, p. 6

³⁸⁾ Jean-Joseph Mounier, *Nouvelles observations sur les Etats-généraux de France*, 1789, pp. 211-213; Pierre-Victor Malouet, *Avis à la noblesse*, 1788; Nicolas Bergasse, *Lettre de M. Bergasse à MM. les officiers de la ville de Saint-Germain-Laval, en Forez*, Paris, 1789, pp. 3-5.

ち「国王は、ある方式から別の方式へと絶えず引き廻され、信じがたいほどの軽々しきでそれらを変更したり、採用したり、放棄したりし、強気に出たかと思うと、あっさり譲歩したりするので、完全に権威を失ってしまった。」³⁹⁾実際には、議員たちにとっても、人々の大部分にとってと同様、政府をほぼ麻痺させ、そのために三部会の召集を余儀なくさせることになる切迫した破産は、まったく予想外のものでした。未来のジャコバン派であるペティオンは1789年初頭に「フランス人は現状にびっくりしている。言うなれば、思いもよらずにこうなってしまったのだ」と結論しています。同年11月には、医者で議員のカンプマが「国民が革命をやったわけではない。もし機構を動かすことがまだ可能だったのなら、我々が呼ばれることはなかっただろう⁴⁰⁾。」と書くことになるでしょう。

1787年から89年にかけての国王と大臣たちの行動は、国中に真の政治的動員を生み出しました。名士会、1787年から88年にかけての地方議会、とりわけ三部会の選挙と陳情書の作成がその点で果たした役割は知られています。1788年7月のデクレが地方に引き起こした政治化の重要性も、過小評価してはなりません。このデクレ故に第三身分は貴族との政治的関係を再検討するようになったのです⁴¹⁾。この動員を生み出した国王デクレにはすべて、国王と「国民」の関係に関する、「革命的」とまでは言えないまでもかなり大胆なコメントが寄せられました。1789年初頭にタルジェはこれらのデクレのいくつかの部分を抜粋し、「国家構造のすべての原則が国王自身によって表明され、確認され、聖別されている」と結論しています⁴²⁾。

1788年秋の政治的動員は、話が混み入っています。大臣ネッケルの行動とドーフィネの反抗の事例がかなりの影響を及ぼしていますが、地方ごとに、政治的結合の制度的傾向やローカルな性格に応じて、様々な性格をおびています。もっとも普通の討議の場は市当局でした。市参事会そのもの場合もあれば、そのために形成された抵抗委員会の場合もありました。しかし若干の地域では地方三部会も同様に結集の場となり得たのです。当初、1788年の最後の数カ月には、とりわけ議会州（バイ・データ）——ブルターニュ、フランシュ＝コンテ、プロヴァンス、ラングドックなどです——において「愛国者」の組織が相継ぎました。そうした州では、多少は独立的な政治活動がかなり前から存在していたのです。しかし1789年初頭には、政治的動員と国民的再生の展望は、ベリー、ガスコーニュ、マッシフ・サントラルなどの地方のかなり孤立した都市にまで及び始めていました。このような政治化はしばしば、国家レベルでの政治と都市レベルでの政治の間の、すでに存在していたライヴァル関係や相互作用によって形成されたり、そこから影響を受けたりしていました。未来の議員の多くが地域のリーダーとして最初に登場するのは、こうした地方の動きの中においてなのです⁴³⁾。

都市での動員が進むにつれて、各地の圧力団体の代表が、国王や大臣たちに話を聞いてもらうために、パリに押し寄せました。このようにして、1788年から1789年にかけての冬に、多

³⁹⁾ Paul-Louis Target, *op. cit.*, p. 47; Adrien Duquesnoy, *Journal d'Adrien Duquesnoy*, ed. R. de Crévecœur, Paris, 1894, vol. 1, p. 29.

⁴⁰⁾ Jérôme Pétion de Villeneuve, *Avis aux Français sur le salut de la patrie*, 1789, p. 226; Jean-François Campmas, lettre à son frère, le 1 novembre 1789: B.M. Albi, Ms. 177

⁴¹⁾ Pierre Renouvin, *Les assemblées provinciales de 1787*, Paris, 1921; Jean Egret, *La Pré-révolution française, 1787-1788*, Paris, 1962; et *La révolution des notables: Mounier et les monarchiens*, Paris, 1950; Doyle, *Des origines, op. cit.*

⁴²⁾ Guy-Jean-Baptiste Target, *Les Etats généraux convoqués par Louis XVI*, Paris, ca. décembre 1788, pp. 4-6.

くの未来の「愛国派」議員たちが首都において出会い、交流を始めたのです⁴⁴⁾。それにしても、地方に根ざす集会や組織の多さと較べるならば、パリでの革命前の動き自体は当初は比較的穏やかなものでした。パリ高等法院という著名な事例を除けば、首都の政治生活は全体として、地方におけるよりも緊密にコントロールされていたのです。しかしパリジャンはカフェや印刷所、様々なクラブや協会において、王国の諸事件を熱心に追っていました⁴⁵⁾。こうした非公式な集まりの中でもっとも重要であり、もっとも大きな影響を及ぼしたのは、1788年11月から高等法院判事のアドリアン・デュポールの家に集まり始めたグループでしょう。この「30人協会」——50人以上のメンバーがいたのですが、通常はこう呼ばれています——が王国全体の動員のきっかけとなったわけではありません。この協会が形成された時には、いくつかの地方で数週間前から愛国者たちは戦っていました。しかしこの協会は、威厳、才能およびエネルギーを持ったすぐれた集会を代表していたのです。年末にはこの協会は、自由主義的なパンフレットの流布と三部会における議員ごとの投票の要求において、おそらく重要な役割を演じていました。三部会に選出された28名のメンバーは、最初の年に国民議会における自由主義的な動きの中核をなすことになるのです⁴⁶⁾。

この同じ89年春には、大勢の貴族の側からの重要な反動も現れます。愛国者の見解に遭遇して、真の貴族的党派が生まれたのです。保守派のもっとも強力な抵抗は、貴族がすでに組織されており、地方三部会や高等法院があったおかげで集団行動の経験を経ていた地方において、まさに現れたのでした。その上、これらの地方は第三身分の側からのもっとも手ごわい反対の場でもあったので、活動と反動との政治的弁証法が急速に作りだされたのです。1788年末のパリにおいて、高等法院の司法官で後の議員であるデュヴァル・デプレメニルは、自由主義的な愛国者に反対する百人ほどの貴族を結集させ始めます⁴⁷⁾。結局のところ、この「百人委員会」は貴族層に対して、恐らく30人協会よりも大きな影響を及ぼしたようです。1789年春に三つの身分が召集された時、もっとも重要な課題に関して政治的両極化が存在しているのを、未来の議員たちははっきり意識していました。ラボー・ド・サン＝テチエンヌは三部会の開催前に

⁴³⁾ 例えば Barthélémy Pocquet, *Les origines de la Révolution en Bretagne*, 2 vols, Paris, 1885; Monique Cubells, *Les horizons de la liberté: Naissance de la Révolution en Provence, 1787-1789*, Aix, 1987; Jean Girardot, *Le département de la Haute-Saône pendant la Révolution*, Vesoul, 1973, vol. 1; Charles Jolivet, *La Révolution dans l'Ardèche, 1788-1795*, Largentière, 1930; Marcel Bruneau, *Les débuts de la Révolution en Berry (1789-1791)*, Paris, 1902; G. Brégail, "Le Gers pendant la Révolution", *Bulletin de la Société d'histoire et d'archéologie du Gers*, 1929; Pierre-Jean-Baptiste Delon, *Les élections de 1789 en Gévaudan*, Mende, 1922.

⁴⁴⁾ ダントレーグ伯爵の1789年2月11日の手紙における描写 ("Correspondance du marquis de Satillieu au début de la Révolution. Lettres du comte d'Antraigues," *Revue du Vivarais*, 1956, p. 104) およびフランソワ＝アントワヌ・ボワシ＝ダングラの1789年4月4日の手紙における描写 ("Correspondance de Boissy D'Anglas avec le marquis de Satillieu au début de la Révolution", ed. H. Hillaire, *Revue du Vivarais*, 1943, p. 140) 参照。

⁴⁵⁾ Jean-Sylvain Bailly, *Mémoires d'un témoin de la Révolution*, ed. Berville et Barrière, Paris, 1821-22, vol. 1, pp. 7, 9-10; Alexandre Lameth, *Histoire de l'Assemblée constituante*, Paris, 1828-29, vol. 2, pp. 6-7; Augustin Challamel, *Les clubs contre-révolutionnaires*, Paris, 1895, pp. 23-66.

⁴⁶⁾ Daniel L. Wick, *A Conspiracy of Well-Intentioned Men: The Society of Thirty and the French Revolution*, New York, 1987.

⁴⁷⁾ D'Antraigues, *op. cit.*, p. 97; François-Antoine Boissy d'Anglas, "La Révolution vue de Paris et d'Annonay", *La revue universelle*, 1988, p. 50.

「二つの党派がすでに形成されている」とかいています⁴⁸⁾。

集団力学

最後に、議員たちの急進化を理解するには、第三身分の集会内部における集団心理学の複雑な過程を考慮に入れなければなりません。彼らの大部分にとっては、5月5日以降、三部会の経験を特長づけるあの異様な創造の時期においてこそ、真の「精神革命」が起こったのでした。やる気に満ちていて才能もある人たちがこんなにも集まったので、刺激・競争・相互の高め合いの力学、一種の「集団セラピー」が創出され、急速に活発になったのでした。何人もの議員が、この時期に感じた仲間意識と兄弟愛の感情についてコメントしています。未来の国民公会議員で、父親と一緒に三部会に来ていたアントワヌ＝クレール・チボドーにとっても、新しい集団心理学が生まれていたのは明らかでした。彼は「孤立していたら議員は恐怖にとらわれるだろうが、議会に集結したので、彼らは大きな勇気を示したのであり、揺るぎなかったのだ」と書いています。クルーゼ＝ラトゥーシュにとって、「徳と力、思ってもみなかったような手段を発揮するよう我々を駆り立てた」のは議会の経験と過程でした⁴⁹⁾。

議員たちは、議場で耳にする演説からも多くの影響を受けました。何人もが、演説家が持つすぐれた資質について指摘しています。フランドルの農園主であるルプートルによれば、それは「恐らくこの世でもっとも偉大な才能」です。彼らはとりわけ、ブルターニュの急進派議員とその仲間たちが持つ説得力を認めていました。「彼らは想像力が活発なので、怒濤のごとくに走り、自分たちに反対しようとする者をすべて押し流してしまう」とアントワヌ・デュランは書いています。6月半ば以前に、このケルシーの議員は次第に急進的な演説家たちの虜になっています。彼らは「抗しがたい力で精神を打ちのめし、(第三身分のメンバーに)自分たちが取っていた意見の危険性に気付かせ、それを正しい方向に導く」のです。ワイン商人のガントレの場合も同様で、彼の手紙からは、自分が耳にした演説から取られた新しい用語、新しい考え方を取り入れていくのが、毎週のように見られるのです⁵⁰⁾。メナール・ド・ラ・グロワは数カ月後に、自分が経験したイデオロギー的習練について妻に語っています。「我々の審議は私にとって、快適で役に立つ学校なのだ。そこでは普遍的理性がみずからの支配を確立するのが... 見られる⁵¹⁾。」

フランス革命のこの「集団セラピー」、この「学校」は恐らく、議員と民衆との相互作用によってさらに強化されました。5月4日の開会行列のとき以来、第三身分の代表は、自分たちを取り巻く群衆の支持と熱狂によってもたらされた歓喜の感情について語っています。デュケノワは5月初めに議場を離れる際、擲弾兵が「なんてこった、諸君、動じるな」と挨拶したこと

⁴⁸⁾ Jean-Paul Rabaut-Saint-Etienne, *Précis historique de la Révolution française*, Paris, 1807, p. 92

⁴⁹⁾ Antoine-Claire Thibaudeau, *Biographie, Mémoires*, 1765-92, Paris, 1875, p. 82; Jacques-Antoine Creuzé-Latouche, *Journal des Etats généraux et du début de l'Assemblée nationale, 18 mai-29 juillet 1789*, ed. Jean Marchand, Paris, 1946, p. 133.

⁵⁰⁾ Pierre-François Lepoutre, lettre du 24 juillet: *Député-paysan et fermière de Flandre en 1789, La Correspondance des Lepoutre*, ed. Jean-Pierre Jessenne et Edna Hindie Lemay, Villeneuve d'Ascq, 1998; Antoine Durand, entrées du 8 mai et du 16 juin: Archives de l'évêché de Cahors, carton 5-56; Claude Ganteret, lettre du 17 juin et passim: collection privée de Françoise Misserey, Dijon.

⁵¹⁾ François-René-Pierre Ménard de La Groye, *Correspondance (1789-1791)*, ed. Florence Mirouse, Le Mans, 1989, p. 95

を描いています。デュランは市議会議員がいたる所で「ほとんど熱狂的な歓喜」をもって迎えられると述べています⁵²⁾。6月、7月および8月の革命的事件の際には群衆が常に出現しています。彼らは、第三身分の議員が閉鎖された議場からジュ・ド・ポームに赴いたり、サン＝ルイ教会に席を占めたり、国王に代表団を送ったりする際に——まるでギリシア悲劇のコーラスのように——彼らのそばで拍手し、叫び、付き添うのです。6月27日や7月15日のような、危機的な事件の後には、議員たちはあちこちでもてはやされ、通りで女商人たちからキスされ、食事をしている時に花束を贈られたのでした⁵³⁾。確かに、議員たちの多くは群衆の暴力に当惑し、狼狽して、距離を置こうとしました。とりわけ7月22日にパリで国王役人のフーロンとベルチエ・ド・ソヴィニーがリンチにあった際にはそうでした。しかし三部会の最初の数週間には、公衆の熱烈な支持は議員たちの信頼と自尊心を高めずにはおかなかったものであり、「世論」とか「一般意志」とかいった、それまでは抽象的で文学的な概念に過ぎなかったものの新たな理解を植えつけたのでした。ロレーヌの司法官であるマイヨは「選挙人は自らのエネルギーと純粹さを、公衆の意見と監視からくみ取らねばならない」と書いています。ランの市長であるロラン・ド・ヴィスムはより単刀直入に「世論が我々の力をなす」と書いています⁵⁴⁾。

しかし、同時代人の書簡やメモワールに基づくと、第三身分の急進化にとってもっとも重要だったのは、貴族の頑固さでした。当初、ヴェルサイユに到着した時には、第三身分のメンバーの何人かは貴族との妥協を求める用意があり、いくつかの問題に関しては身分ごとの投票すら認めるつもりでいたのです⁵⁵⁾。しかし、第二身分を牛耳っている保守派はいかなる種類の妥協にもまったく耳を貸す用意のないことが、じきに明らかになりました。実際、5月から6月にかけて、第三身分の内部で展開したのと同じような集団力学が貴族身分においても作りだされ、その力学が貴族の大部分をさらに一層反動的な立場へと導いたのです⁵⁶⁾。少数の自由主義的貴族による努力がありはしたものの、大多数はあらゆる形の妥協を放棄し、義務、名誉、忠誠といった騎士道的な用語を用いながら、カースト的な特権の力を擁護したのでした⁵⁷⁾。

第三身分の議員たちは、こうした頑迷さに対して激しく反応しましたが、恐らくそれ以上に、貴族たちの態度に対して反発したのでした。実際、5月の第2週から第三身分の中の過激派はブルターニュ代表を中心に組織を作り、議員たちの権限は三身分合同で、議員ごとの投票により審査することを要求しました。5月18日にはル・シャプリエが、第三身分が他の二身分を「召集」し、「国民議会」の第三身分代表に合流するよう「要請」することを提案しました。し

⁵²⁾ Adrien-Cyprien Duquesnoy, *Journal d'Adrien Duquesnoy*, ed. R. de Crèvecoeur, Paris, 1894, vol.1, p. 12; Durand, entrée du 4 mai.

⁵³⁾ 例えば, Durand, entrée du 20 juin; Jean-Gabriel Gallot, *La vie et les oeuvres du Docteur Jean-Gabriel Gallot*, ed. Louis Merle, Poitiers, 1961, p.85; Jean-Pierre Boullé, “Ouverture des Etats généraux de 1789”, ed. Albert Macé, *Revue de la Révolution. Documents inédits*, 1889, pp. 30–31.

⁵⁴⁾ Claude-Pierre Maillot, lettre du 7 mai: A.C. Toul, JJ 7; Laurent de Visme, entrée du 23 juin: B.N. Nouv. acq. fr. 12938.

⁵⁵⁾ Duquesnoy, *op. cit.* vol. 1, p. 22; Maupetit, *op. cit.* vol.17, 1901, 450; Ménard de La Croye, *op. cit.*, 38; Pierre-Paul Nairac, entrée du 19 mai: A.D. Eure, 5F63.

⁵⁶⁾ とりわけ ms. “Journal des Etats généraux” de Charles-Alexis de Brulart, marquis de Sillery: A.N., KK641, entrée du 6 et 21 juin, et passim.

⁵⁷⁾ Sillery, entrée du 19 juin; Joseph-Geneviève comte de Puisaye, *Mémoire du comte de Puisaye*, Paris, 1803, vol. 1, p. 215; Louis-Jean-Baptiste Le Clerc de Lassigny de Juigné, lettre du 23 octobre: Archives privées du Château de Saint-Martin, Taradeau (Var).

かしながらこの動議は、和解と妥協をめざす反対動議によって、何度も否決されたのです。ポルドーの大商人であるネラクは「(第三身分の) 集会は攻撃的な党派よりも穏和さと調和の党派によって導かれている」と記しています⁵⁸⁾。しかし数週間のうちに、第二身分は頑迷な貴族によって完全に支配されていることが、次第に明らかになりました。大勢の第三身分代表にとって貴族の態度は、長い間抑制していた憎悪と怨念を目覚めさせるものでした。大部分の人はこうした感情を、統一の名のためにこらえてきたのです。彼らを憤慨させたのは、貴族の頑迷さのみならず、自分たちが赦しがたい軽蔑と尊大さをもって扱われたことでした。ほとんど皆が、自分たちに対する貴族の蔑視と傲慢さに不満を述べています。「あまりにも横柄な彼らの態度」(ルプートル)、「彼らの倨傲さと傲慢さ」(フォルコン)、「一步も譲ろうとしない集団の倨傲さと自惚れ」(デュラン)などです。またガントレは、自分たちが以前に「ブルターニュ議員の意見を……用心しすぎたために、また自分たちの要求に慎重でありすぎたために」否決してしまったことを後悔しています⁵⁹⁾。

このような、かなりドラマチックに変容した精神状態において、第三身分の議員たちは1789年6月の明らかに革命的な諸宣言を採択したのでした。すなわち主権を持つ国民議会の創設、この議会に課税権を認める動議、新憲法の制定をめざすジュ・ド・ポームの誓いなどです。これらのデクレは、大部分の議員にとって、数週間前だったら思いもよらないものだったでしょう。このように、階級闘争というよりは、尊敬と敬意(ステイタス)を求める闘争から発した社会的敵意が、1789年6月の急進化の過程において、ひとつの重要な要因となったのです。

結 論

今回お示した急進化の分析は、1789年5月から6月にかけての第三身分議員の歩みに基づいた分析ですが、フランス革命の通称「修正派」的解釈の基本的な命題のひとつを確認するよう思われます。それは、国王政府が直面しなければならなかった政治上・税制上の重大な危機は、革命の到来にとって必要不可欠な条件だということです。とりわけ、この同じ政府によって、破産を回避し、貴族や高等法院の反対をかわすために取られた措置が、平民層の政治化をもたらしたのでした。しかし君主制の問題は、それ自体では、国王がヴェルサイユへの召集を決めた後の第三身分議員の行動を説明することはできません。三部会開会以降の議員たちの急進化を理解するには、貴族と第三身分の社会的敵対関係や、集団の相互作用がもたらす創造的過程をも考慮に入れるべきです。革命初期のこの過程では、イデオロギーは逆に、我々の見るところでは、まったく小さな役割しか果たしてはけません。それと言うのも、結局のところ、1789年以前には単一の啓蒙イデオロギーを語ることは非常に困難だからです。我々はむしろロジェ・シャルチエの命題に同意します。それは、啓蒙という概念は「首尾一貫して統一化された哲学という意味では、革命が啓蒙の産物であるのと同じくらいに、革命の産物なのである」というものです⁶⁰⁾。

⁵⁸⁾ Nairac, entrées du 19 et 29 mai; Maupetit, p.136; Duquesnoy, *op. cit.*.. vol. 1, pp. 19–20; Pierre-François-Balthazar Bouche, lettre du 31 mai: A.C. Forcalquier, Series D, “Correspondance 1789”.

⁵⁹⁾ Lepoutre, lettre du 28 mai; Félix Faulcon, *Correspondance. Tome 2: 1789-91*, ed. G. Debien, Poitiers, 1953, p. 37; Durand, entrée du 30 mai; Ganteret, lettre du 5 juin.

⁶⁰⁾ Roger chartier, *Les origines culturelles de la Révolution française*, Paris, 1990, p. 14.

革命が始まってしまうと、89年夏以降には、議員たちの急進化を押し進める因果関係は少し変わります。革命のこの「第二局面」について分析を続けることは、今回はできません。しかし8月以降はイデオロギーと政治がともに、革命の力学においてより重要になるように思われます。議員たちのうちの少数でも重要な人々が、急速にルソーのいくつかの著作——とりわけ『社会契約論』——を、達成すべき目標を指し示したテキストとして受け入れるようになります。ほぼ同じ時期に、代表者たちは次第に増大する党派政治の影響をこうむるようになります。党派間の行動と反動の政治的弁証法が、革命の心理学にまったく新しい性格をつけ加えます、この党派とはイデオロギー面での結びつきもと人間的なつながりによる結合双方から形成されたのですが。最後に、偶然的なできごと、すなわち議員の決定に影響を与えた一連の外発的な事件が議員の急進化におよぼしたインパクトを過小評価してはなりません。大恐怖や国王行政の崩壊、および1789年秋の市民的服従の全般的な崩壊によって、それまでは不可触だと思われていた執行権をも議員が浸食するようになり、それまでは決して引き受けなかったようなあらゆる種類の問題に対して、ありあわせの答えをひねり出そうとするようになったのです。国家の破産が差し迫ったので、議員たちは教会財産の没収と聖職者の再組織化に対するそれまでの反対を考えなおしました。多くのフランス人が共和主義の考えを抱くようになったのは、1791年6月に国王が逃亡し、ルイ16世がそれまでにサインしたデクレを放棄したからですが、共和主義など1789年にはフランス人は想像すらしませんでした⁶¹⁾。

ここで示した急進化のモデルを、他の革命の動きにも適用することができるでしょうか。あまり明らかではありません。89年の人々はかなりの程度、自分たちがまったく新しい企てに参加しているのだと自覚していました。このような革命はまったく期待されていませんでしたし、自分たちはかつて誰も試みたことのないことをしているのだと、ずっと感じていたのです。しかし19世紀全体を通して、ヨーロッパでもそれ以外でも、1789年の諸事件の思い出は、何が可能であり、成しうるのかという点での展望を完全に変容させてしまいます。この後の革命家たちはほとんどすべて——ルイ・ブランやラマルティエヌからマルクスやレーニンまで——進んでフランス革命を手本もしくは先例として用います。この意味において、近代で最初の大革命は無視しえないパラダイムを創出するのであり、後に来る革命家たちすべての予断、態度、イデオロギー、想像世界にその影響を与えるのです。

(原著者：ティモシー・タケット カリフォルニア大学教授)

(訳者：山崎耕一 一橋大学社会科学古典資料センター教授)

⁶¹⁾ 拙著 *When the King Took Flight*, Cambridge Mass., 2003.